「救われるべき者の初穂」　　七里教会　　２０２２年5月２９日

テサロニケの信徒への手紙二２章 13-17

佐々木　佐余子

時はローマ皇帝が地中海一帯を支配していたころ、パウロは１回目の宣教旅行を終わり、２回目の旅行をしていた頃でした。主イエス・キリストの信徒たちは、天地創造の神を信じ、そのひとり子である救い主イエス・キリストが神であると信じていたので、ローマ皇帝を神として礼拝している国家からは受け入れられず迫害されていたのです。教会はこの世と妥協せず信仰を固く守っていました。ところが、次第に辛くなってきます。信徒たちは、イエスさまの来臨を待ち望むようになりました。「主よ、来たりませ」（マラナ・タ）と待ち望むようになりました。イエスさまが地上に来られたら、わたしたちは救われ、み国に行けると期待したのでした。

正直言って、主の来臨はわかりにくいです。あまりにも現実的でないので、つい空想の話を聞いているような気持になってしまいます。ところが、テサロニケの教会の信徒たちは、切実な問題なのでした。聖書では、時々、死を眠っていると考えていました。主イエスが神の国を伝えている時のこと、会堂司のヤイロという人が来ました。このヤイロの娘は病気で寝込んでいて、何とかイエスさまに癒していただきたい、とお願いしたのです。ところが、他の女性が切羽詰まった状況で、主イエスのみ衣にさわってしまったのです。主イエスが、すぐ気が付いて、「誰か、わたしの衣服にさわった」と感じて辺りを見渡しておられた時、この女性が震えながら、「わたしです」と言ったのです。ところがイエスさまは叱るどころか、この女性の病気を癒されました。そのころ、会堂長の娘は死んでしまったのです。それで、イエスさまが会堂長のヤイロの家に行くと、泣いている人々の中で、家の中に入り、こう言われました。「なぜ泣き騒ぐのか、子供は死んだのではない。眠っているのだ」とおっしゃったのです。人々は嘲笑いました。しかし、主イエスはこの１２歳の娘を「タリタ・クミ　少女よ、さあ、起きなさい」と言われ、蘇らされたのでした。

一方、テサロニケのクリスチャンたちは、主イエスは間もなく来臨すると信じ、その日を迎えることに希望を持っていました。ところが、パウロたちがテサロニケを去った後に、何人かのクリスチャンたちが戸惑ったのです。主がまだ来臨されない内に、愛する人が死んだら、その人は祝福を受けられず、救いの完成にあずかることが出来ないのではないか、と思い悲しんだのでした。そのような人々にパウロは明確に教えます。「あなたがたは知らないのですか、キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかる者となりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。」（ローマの信徒への手紙

６：３－４）と諭しました。主の来臨が来ない内に死んだクリスチャンは、もうすでに主の救いにあずかっているのだから心配することはないと教えたのでした。

そして、パウロは３節で警告しています。「だれがどのような手段を用いても、だまされてはいけません。なぜなら、まず、神に対する反逆が起こり、不法な者、つまり、滅びの子が出現しなければならないからです。」と語ります。これは、主の来臨が来るには前兆が起こることを教えています。突然、来るのではなく２つの前ぶれが起こるのです。１つはクリスチャンの背教です。背を向けることです。今まで信じていた人々が向きを変えて信じなくなることです。次に不法の人が出現することです。不法の人とは滅びの子、反キリストの人です。反キリストはサタンの手先になって、主イエス・キリストに対抗する人々です。４節にあるように、「この者は、すべて神と呼ばれたり、拝まれたりする者に反抗して傲慢にふるまい、ついには、神殿に座り込み、自分こそは神であると宣言するのです」とありますが、歴史を紐解くとこのような人がいたようです。パウロや当時の信徒たちには大体の見当が付いているのでしょう。パウロはここで実名は伏せています。そして、８節を読むと、「その時が来ると、不法の者が現れますが、主イエスは彼をご自分の口から吐く息で殺し、来られるときの御姿の輝かしい光で滅ぼしてしまわれます」と語っています。

そして、今朝の１３節から１７節に入るのです。大分前置きが長くなりました。パウロは常に、テサロニケのクリスチャンたちを褒めました。１３節でパウロは彼らを救われるべき者の初穂として、神はお選びになった、と言っています。素晴らしいですね。何という光栄でしょう、このように言われるなんて。パウロがテサロニケを去った後、彼らはイエスさまの教え、パウロの教えをしっかり守って生活して、周囲の同労の者たちの良き模範となっていたのです。初穂はイスラエルではどのような意味合いでしょうか。初穂はとても大事な意味があるのです。この初穂を英語で言うと、First　fruits 最初の果物、初なりのことを初穂というのです。イスラエルでは 3 つの大きなお祭りがあります。２月か３月頃にある過越の祭りと５月頃にある刈り入れの祭り、これが今日ペンテコステ礼拝に続けられていくのです。それと１０月頃にある仮庵の祭りがあります。これは今の収穫感謝礼拝に繋がります。初穂とは主イエス・キリストも初穂なのです。コリント書に書かれていますが、「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。」（コリントの信徒への手紙一１５：２０）旧約の時代から初穂は大事な献げものでした。特に、ペンテコステには、新しく実った小麦の粉にパンだねを入れて作ったパンを祭壇に献げたのです。パウロは手紙の最後に個人的な挨拶を残していますが、こうあります。「わたしの愛するエパイネトによろしく。彼は、アジア州でキリストに献げられた初穂です。」（ローマ１６：5）と言っています。この人は、エフェソ教会の最初の改宗者だったのです。また、こうも言っています。「兄弟たち、お願いします。あなたがたも知っているようにステファナの一家はアカイア州の初穂で聖なる者たちに対して労を惜しまず、世話をしてくれました。」と感謝しています。（コリント一１６：１５）　このステファナの一家は、奴隷を含めてアカ

イア州の最初のクリスチャンの家族で、その家は教会の集会に用いられておりました。アカイア州とはギリシャですが、そこにコリントという町があります。主を信じる群れが出来ていたのでした。

ここに集まる皆さん方も多くは信仰的に初穂ではないでしょうか。私も家族で最初の初穂です。日本にプロテスタントの信仰が伝わって約１６０年の歴史ですが、中には「私は６代目のキリスト者です」と言われる方もおられます。親戚中キリスト者ばかりで教会に行くのが当たりまえで、行かない人がいると「あの人変わっているね」という家庭もあるそうです。

１４節でパウロはこう言っています。「神は、このことのために、すなわち、わたしたちの主イエス・キリストの栄光にあずからせるために、わたしたちの福音を通して、あなたがたを招かれたのです。」パウロは救いに選ばれた者の生き方として、信徒に励ましと祈りへと向かうよう筆を動かしています。神は招かれているのです。神は初穂としてあなたがたをお選びになった、とあるように神の選びが先行しています。決して自分が選ばれるように働きかけたのではなく、自分の努力で勝ち取ったのではない。神が選んでくださったという信仰です。そこで人間の側では不思議に思うでしょう。なぜ私を？ごく普通の平凡な私を？もっと秀でた人を選べばいいのにと思うのです。それは神しかわからない予定の教理です。パウロはイスラエルの選びについてローマ書で語っています。アブラハムの子イサクは結婚し双子の兄弟をもうけました。エサウとヤコブです。この２人のうち、神が愛したのはエサウではなくヤコブでした。「では、どういうことになるのか。神に不義があるのか、決してそうではない。神はモーセに、『わたしは自分が憐れもうと思う者を憐れみ、慈しもうと思う者を慈しむ』と言っておられます。従って、これは、人の意志や努力ではなく、神の哀れみによるものです」（ローマ 9:13-16）と神の正当性を言っています。ですから、わたしたちがここに招かれているのは大変な恵みな事なのです。

パウロは迫害のさ中でこう語ります。１６節１７節「わたしたちの主イエス・キリスト御自身、ならびに、わたしたちを愛して、永遠の慰めと確かな希望とを恵みによって与えてくださる、わたしたちの父である神が、どうか、あなたがたの心を励まし、また強め、いつも善い働きをし、善い言葉を語る者としてくださるように。」と、テサロニケの人たちに祈りました。この言葉はテサロニケの信徒たちだけではなく、今の現代のキリスト者にも語られているのではないでしょうか。でも善い働きや善い言葉を語ることは、本来はとても難しいことですね。訓練をしないと出来ないように感じます。特に近しい関係になると気を付けたいです。故に、主イエスと父なる神とが、彼らの心を慰め、勇気づけ強めて、言葉や行いにおいて善く正しくさせて下さるように、と祈っているのです。

わたしたちも神に召されて教会生活を送っています。毎週のことなので恵みにも慣れてしまっていないでしょうか。主に召された私たち、常に神の御力をいただいて歩めるよう祈りたいと思います。